



東海道の宿場町から蔵の町へ

江戸時代の藤沢宿の特徴の一つとして、多くの道が集まる場所であったことがあげられます。江戸の人々に人気の参詣地であった江の島や大山へ向かう参詣路（江の島道、田村通り大山道）、遊行寺前から東へ向かう鎌倉道、北側には八王子道や厚木道といった道が集まり、流通の中心として発展しました。明治時代になって宿駅制度が廃止されても、その賑わいは衰えることはなく、地の利を活かして広範な流通の場となり、卸売商等が軒を連ねる商人の町として隆盛をみせます。旧藤沢宿の町なみの変化の転機となったのは、明治10年代に相次いだ大火による被害です。特に明治13年（1880年）の「大川屋火事」は宿場の東半分が被害にあうという大規模なものでしたが、当時すでに土蔵造を導入していた蔵と店舗は何事もなかったかのように残っていたとされます。この経験をふまえて旧藤沢宿でも「いつとはなしに黒白とりどりの土蔵造の店舗が軒を並べるようになった」(*)といい、「蔵の町」の町なみが形成されていたことがうかがえます。しかし、大正12年（1923年）の関東大震災による倒壊、またその復興期の旧東海道の道路の拡幅工事によって、多くの蔵や店舗が失われました。震災後は金銭的にも負担の大きい店舗を建設することは敬遠され、旧藤沢宿の町なみも大きく変わりました。かつての「蔵の町」を物語る現存する店舗は桔梗屋のみとなっています。

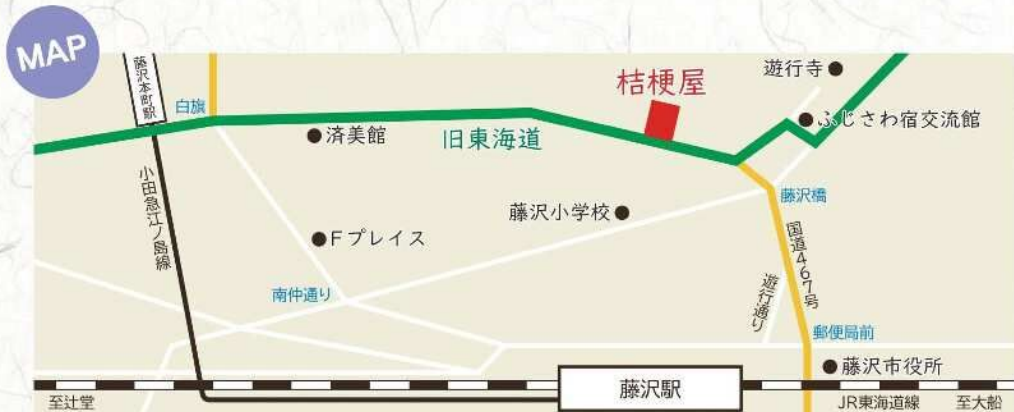


かつての「蔵の町」のようすを伝える絵はがき

(※引用：川口政治編『川上康翁を偲んで』昭和18年(1943年)刊)

文化財の登録制度

国登録有形文化財（建造物）とは、平成8年（1996年）に新設された文化財登録制度に基づき、建築から50年を経過した歴史的建造物のうち一定の評価を得たものを文化財として登録するものです。届出制という緩やかな規制を通じて、文化財の保存と活用を促進するものであり、地域の風景として残していきたい建造物や、地域で親しまれている身近な建造物を、地域の資産として活用しながら保存することを目的としています。



所在地

藤沢市藤沢1丁目1-9

※内部非公開
外観のみ自由見学可
※専用の駐車場・駐輪場は
ございません。

JR藤沢駅北口徒歩10分



国登録有形文化財(建造物)

桔 梗 屋

店蔵・主屋・文庫蔵



桔梗屋は、江戸時代の嘉永年間（1848～1855年）頃から東海道の藤沢宿において、茶や紙の間屋を代々営んでいた旧家です。現在の建造物のうち店蔵と主屋は4代目齋藤清右衛門が明治44年（1911年）に竣工したもので、令和2年（2020年）9月まで紙商の店舗として利用されていました。一部に後世の改造はあるものの当初の姿をよく残しており、各所の造作からは優秀な左官技術がうかがえます。特に黒漆喰塗の外壁と観音開窓などの意匠は江戸型と呼ばれる店蔵の典型的な特徴とされます。明治～大正時代の旧藤沢宿の町なみは土蔵造の蔵や店舗が建ち並ぶ「蔵の町」でもありました。かつての景観を現代に伝える貴重な存在であること等が評価され、国登録有形文化財（建造物）に登録されました。

	みせぐら 店蔵	しよおく 主屋	ぶんこくら 文庫蔵
構造・形式	土蔵造2階建、切妻造、棧瓦葺	木造2階建、切妻造、トタン葺	土蔵造3階建、切妻造、棧瓦葺
建築年代	明治44年（1911年）	明治44年頃 昭和初期増築	文久元年（1861年） 大正14年（1925年）改修
登録年月日	平成25年（2013年）12月24日		
登録の基準	国土の歴史的景観に寄与しているもの		

店蔵

明治44年(1911年)竣工。街道に南面して建ち、梁間(短手方向)3間(約5.45m)、桁行(長手方向)4間2尺(約8.48m)の上屋の前面に、奥行半間(約0.9m)の下屋庇を設けています。外壁の黒漆喰塗、2階の深い下屋は江戸型と呼ばれる店蔵の特徴を表しています。平成元年(1989年)に1階正面をガラス戸にする等、一部に改造はあるものの、外観・内部ともに建築当初の姿をよく残しており、関東大震災前の「蔵の町」としての様相を伝える貴重な存在となっています。



店蔵 南側外観

軒の鬼瓦は
桔梗屋の屋号である
「ヤマサン」



店蔵の軒の鬼瓦(図①)



店蔵の棟札(図②)

桔梗屋の
評価ポイント
建築年代が明確

主屋

明治44年頃建築。店蔵の北側に接続して建ち、梁間2間半、桁行6間の2階建てで、1階はゲンカン・ブツマ・オクノザシキの8畳3室を一例に配しています。西側に張り出す箇所は関東大震災後の増築、昭和初期に2階の一部を増築しました。店蔵と西端を揃えて設計されていることやその様式からみて、店蔵と同時に建設されたものと判断されています。

1階のブツマ・オクノザシキは家族の生活の場であり、特に北側のオクノザシキは床・違棚・平書院を備えた格の高い造りで当主の居室らしい落ち着いた空間となっています。



主屋 東側外観

桔梗屋の
評価ポイント
優れた左官技術を
伝える



店蔵正面の観音開窓と軒蛇腹(図④)



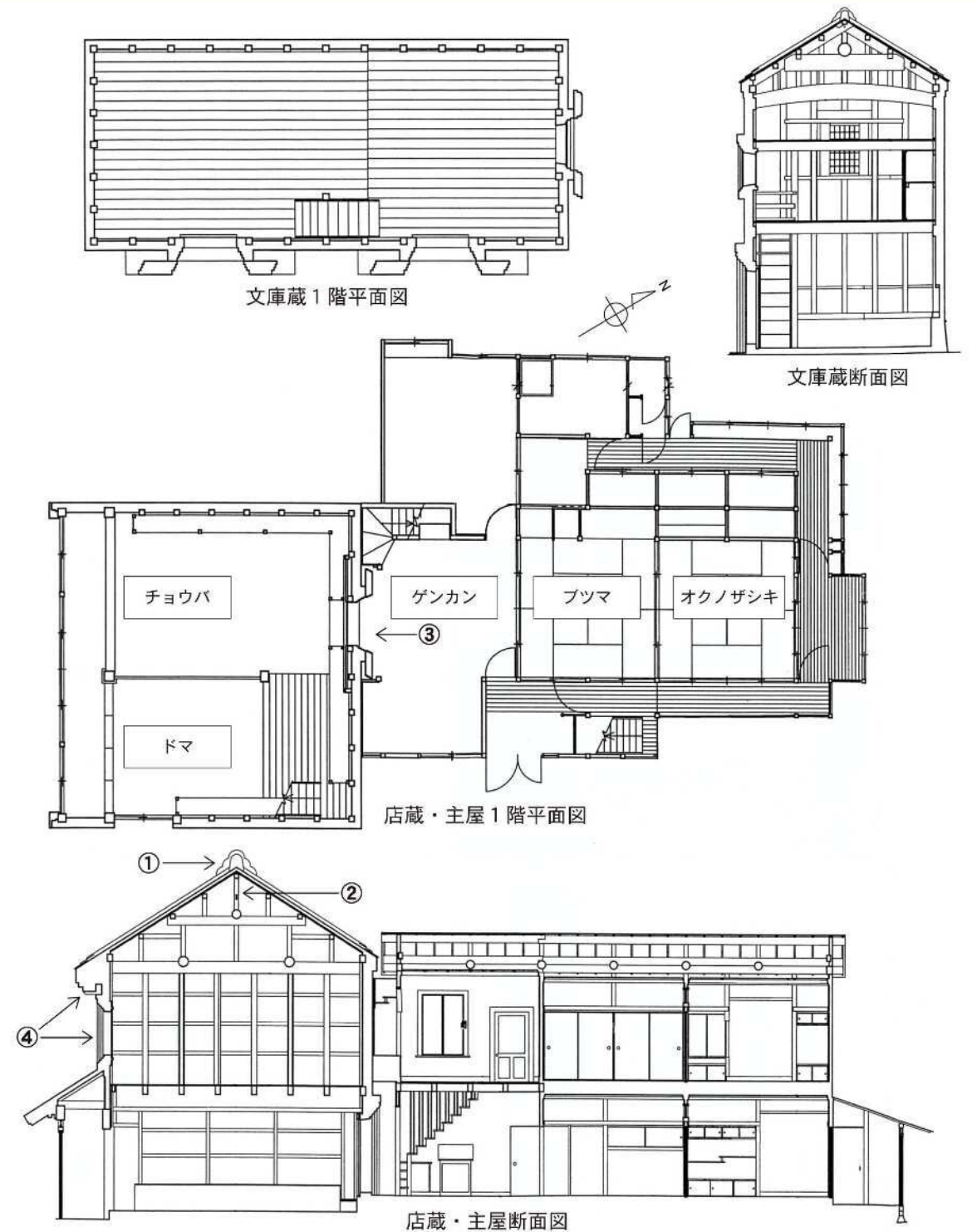
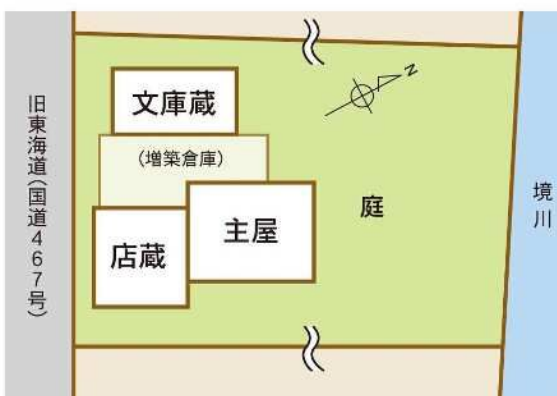
店蔵と主屋の接続部の「千人扉」(図③)

文庫蔵

文久元年(1861年)建築。敷地の西側に建ち、梁間2間半、桁行6間の3階建て。元は、桔梗屋の西側に隣接した質屋の蔵として建てられたものを大正10年(1921年)に5代清右衛門が譲り受けたこと等が棟札から判明しました。譲渡前の明治42年、譲渡後の大正10年・14年の3度にわたり修理が行われていますが、旧藤沢宿における江戸期の建築が現存する数少ない事例として貴重な存在です。



文庫蔵 南側外観



図面引用：「旧藤沢宿 歴史的建造物調査報告書」平成16年(2004年) 東海大学工学部建築学科 小沢朝江研究室

桔梗屋の歴史

桔梗屋は鎌倉で寺侍の賄方をしていた初代齋藤清右衛門が創業したと伝えられています。創業年代は明らかではありませんが、記録によると嘉永年間にさかのぼることができます。創業当初は街道の南側に位置していましたが、4代清右衛門による店蔵の建設に合わせて、街道の北側に位置する現在地に移転しました。移転当初の間口は店蔵の幅のみでしたが、大正10年に西側を、関東大震災後には東側の敷地を取得し、現在の敷地の規模となりました。



関東大震災前の古写真